
月 刊

MéLange

Vol. 134



2018.06.24

詩と評論

◆ 戦艦は爆沈する

千田草介

大和 3000余名中269名生還
陸奥 1474名中353名生存
扶桑 約1300名中生存者無し
山城 約1500名中10名
フッド 1419名中3名
バーラム 1184名中323名
クイーン・メリー 1275名中20名
インヴィンシブル 1032名中6名
インディファティガブル 1019名中2名
アリゾナ 1177名殉職

詩・俳句

- 戦艦は爆沈する ……千田草介 03
高台の学舎 ……野口裕 04
インスタント上海 ……黒田ナオ 05
パリ パール Paris Pâle ……月村 香 06
にじりて ……大橋愛由等 07
日常 ……にしもとめぐみ 08
季節外れ詠（俳句） ……岩脇リーベル豊美 08
水産加工場 ……中嶋康雄 09
ゆれて ……北岡武司 10
移送記憶／自転車と崇高な自転車 ……高谷和幸 11

連載／エッセイ

- 神戸詞あしび 123 「奄美と「西郷どん」の背景を考えてみた」 ……大橋愛由等 12

表紙の写真は、神戸市東灘区で五月に行われるだんじり祭りでの一場面（撮影・大橋愛由等）

編集部だより★54／6.18 久しぶりの大きな地震だった（震源は大阪府北部）。何人かの方からお見舞いのメールをいただいた。その御礼としては失礼だが、詩人F・Sさんに出した返信メールを転送することにしよう。

「今回の震災後、空を見上げました。／鳥のことを考えました。／阪神・淡路大震災が起きたのは1月。燕が帰ってくるのはもう少し後の早春。／営巣の場所がない。／激変した神戸の街をみて驚きためらったことでしょう。／やがて始まる家屋の解体作業。／更地がひろがる拙宅周辺では、鴉が上空から猫を急降下で襲います。／隠れ場所が少なくなった猫はただただ逃げます。／解体が終わり、拙宅の周辺は新興住宅地のような更地ばかりになります。／拙宅に東西南北から風が吹き寄せます。／知念栄喜氏はこう言いました。「まるで古代ですね」。／更地はやがてブッシュとなり、拙宅の東隣の更地には二頭のウリ坊が住みつきます。／県の林務課に連絡しました。「知ったことではない」／夏。子どもたちと蝉取りをします。周辺は更地ばかりなので塀もなく、他人の土地に入り放題でした。／するとどこからか現れたおじさんが叫びます。／「あかんあかん、そこ入ったら」戦前からの家には敷地内に防空壕がしつらえてあり、穴に墮ちるからというのです。／そして秋。ふと思いました。「彼らはどこにいったのだろう」／震災前、拙宅周辺は古い家屋が多く、その軒下に住み着いていたイエコウモリが／夕方になるとハタハタと飛んでいました。／ぼくは空を見上げるようにしています。空もまたいのちの場所です。」★第134回「Mélange」例会は一部が合評会。第二部が誌友・福田知子さんの詩集『あけやらぬみずのゆめ』の出版記念会です。（大橋愛由等記）

◆高台の学舎

野口裕

二本のストローをこすり
一本を宙に吊るし
別の一本を近づけると
ちよつと嫌がるようにストローが回る

百年以上の歴史を持つ古い技術を
習得せんとする若い人たちに
話の始まりとして軽く見せる
電気はややこしいけど
元はこんなだったんだよと

窓の外には海が見え
その先には島があり
近代技術の粹たる橋が
こちらから架かり
何もかもが落ち着いている

若い人たちはいくら金の払ったろうか
ドロップアウトすれば無駄になる金
ともあれ
私の話に食いつかねばならないと
外の景色がどうあろうと

別の窓の外には
こんもりした山があり
中腹に貯水塔らしきものが見え
今は落ち着いている
かつて人の首が切り離された山
タンク山も

◆インスタント上海

黒田ナオ

会社をさぼって
今日はどこ行くの
誰かに聞かれたら
答えてみたい
インスタント上海
偽ダイヤが煌めく翼広げて
幻の街を俯瞰する
背広姿のおじさんが
公園のベンチで
膝にのせた弁当箱の蓋を開けて
しみじみと卵焼きを噛みしめても
まだ十時四十五分
インスタントな昼休みは

いつもと違う時間に
いつもと違う場所で弁当を食べる
ポケットの奥に突っ込んだ
古い切符は上海行きで
尖ったような青空に
三角クラゲが泣いている
寂しいときにはズル休み
いつもと違う方向めざして
後ろへ後ろへ電車は走る
通勤定期を乗り越えて
煙のように間のびした
ぬるい時間を漂いながら
今日は一日休みます
熱が少しあるようですと
電話のときだけ
咳き込んだら
漢方薬でもいかがですかと
猿の頭が踊り出す

◆ パリ パール

月村香

ブルの目をした薄青い顔のようにわたしはパリパールの女いままに恋人を失ったつぶれた顔をもっとたのしげな顔にしたりわたしのまわりを笑いで満たしたいけれどわたしはそういうわたしをもう知らないわたしの天国わたしの草花わたしの月でもでもこの愛よりこの愛がいいだからわたしが白い時間をぴよんぴよんはねて夜会がわたしの真実の愛に近づくとときそれはおかしなちゃちゃわたしはとてもせわしないうさぎのような友だちをもち彼もまたそうだそう願うことの恥らい

◇ Paris Pâle

Comme les yeux bleu pâle, je suis la femme de Paris Pâle. J'ai perdu mon amour just en ce moment. Je ferais mieux d'avoir mon joue en plein gaié, et des rires autour de moi. Mais moi, je perds la mienne, mon paradis, mon herbe, ma lune, mais……Mais, je préfère l'amour et que l'amour. Alors quand je saute dans le temps blanc, ma soirée s'approche de mon vrai amour. C'est étrange mieux-mieux. J'ai les amis comme lapins très vifs. Et lui aussi.

◆ にじりて

大橋愛由等

切り刻まれた花卉から包撰が流出する

(垂直に踊る蝶がいる。公園の端から漂う柑橘類の甘酸っぱい香りが少女を誘引して蝶と垂直踊りをしていく。それは早朝。閉ざされた、いや、閉じていく扉のかすかな音は聞こえていたのだが第六章を読み切ることを選ばしかなかった。リネンのシートにくるまり水曜日を数えていたら英字新聞の「R」が自責と悔悟をともなつてボクに隣座しようとする。「混迷は混迷のままに」と言うけれど「R」はじつとボクを見つめているばかりで、イストワールは第七章の前にたちはだかつてボクに問いを発しようとしている。「R」が冷菓を食べる刻は恩寵と刹那の桎梏かあらがいか」などと。イストワールに向かって小洒落たイストワールをいくらか語りかけても不機嫌は治らず、連関そのものが甘酸っぱさそのものに還元していくのだと言つてはばからない。午前六時三二分。公園で踊りつづけていた蝶がふと覚醒して南溟のリズムで踊りはじめると少女は立ちどまった。「この三角錐はさびしい媚態なの」とでも言いたげな泣き顔となって。少女がほのと流した泪はやはり第七章の章扉のペエジで止まってしまったのであろう。イストワールはその泪をじつとみつめてはいるものの、第七章の文字と意味たちが少女とボクを迎え入れようとしているのに、漏れでる月の仮構がじんわりと溶け始めているのに、辺境の鳥が目眩のために民族を食べそこなっているのに、章扉は近代の微風でも開こうとせずに、かたくなに語りはじめはなになのかを、ボクと少女に問いかけているのだと思われる。

◆ 日常

にしもと めぐみ

朝 起きる
窓を開ける
一日が始まる
いつものように……
大地が揺れた
一瞬ですべてが変わる
人は走る
水を買いに
店では品切れ状態
交通機関は麻痺
自転車が売れる
ガスは 水は 電気は
そんなときでも人は会社へ

◆ 水産加工場

中嶋康雄

魚が積み重なって山になっている
鮮度がどんどん落ちている
作業ロボットが走り回っている
ベルトコンベアで運ばれる魚の
目は白濁している
冷たい加工場の隅で
ゴム長靴がバタバタ交尾している
「休んでいる暇はないぞ」
リーダーが黄色い涎を垂らしながら叫んでいる
魚の切り身が流れてくる
点検する眼球を
流れる切り身どもがじっと見上げて
醤油をたたえた巨大な容器に
流れ落ちてゆく
交尾を終え眠りに落ちてゆく長靴が
ゴミ箱に運ばれてゆく
マスクをした見学者が

◆ 季節外れ詠

岩脇リーベル豊美

女性名詞とり違えたか白雀啼く
接続法第II式薔薇の神おはします
僕の仮説は…と医学生の学期休み
コピー機の取扱い忘る夢見し研究者
詩で喰えるユーチューブという森に住む
麦秋やふたつに割れる夢のあとさき
訣別の雨垂れコンビニ傘の骨を折る
夕月や奇襲仄めかす放物線
籬粟粟の流れる窓に廃墟置く
月裏の基地から持ち帰る宇宙の石
石塊はこれが君？とは喋り出さずに
満月に青い光射す水晶窟碎かる
結界に身を置く紫に水晶かな
惜春や花の写真を墓場より送る

マスクに吸い取られて
消えてゆく
バスがからっぽのまま帰って行く
地下に水が溜まっている
水に異物が混入している
いろんな異物が混ざり合い
白濁している
センサーも反応している
「異常ありません」
と背広を着た案内係が言う
背広が鱗や鱗になり
魚の山に落ちてゆく
バーコードを付けた切り身が
クネクネ自ら小骨を取り除く
空気の中から新しい小骨が現れて
切り身に次々刺さってゆく
切り身はいつまでもクネクネしている
「よくできました」
支配するシステムが
邪魔くさそうに発信する
ときどき底のほうから残響がしみ出る
熱いお茶が出される
出されたお茶を飲む者はもういない

◆ ゆれて

北岡武司

重みを空気にあずけ機体はすべる 珊瑚礁の点在する海は碧玉色に透き徹り 陽をやどす波ひとつひとつが光をはね返し 水面がちかづき水面にちかづき 無人の家やマンションの数々が記憶によみがえる どれかに帰れそうな 放浪のおわりそな予感 どの家にかえられるのか

シュミーズとパンツの一つになった下着が薄暗い木賃宿の壁にかかる 臍から下はレースで女が身にまえばその手の趣味の男を挑発し喜ばせるのだろう どうやって身につけるのか はず脚を通すのか頭からか いやそりやないにせよあれを身につける女もいる それを喜ぶ男がいる

木賃宿は安アパートになり 昔別れた女が下着姿でそこにいた顔は老い艶も張りも失つていても体打ち振るわせ顔つきは不安げに薄つぺらい布団に横たわりこの身にするりとすりよる 萎びた乳房が可哀想ですりよられるままに乳首をさすりさえし抱き締める口から馨しい息をばく

乾涸らびた唇を吸えば嬉しげにうっとり溶けしがみつく 肌も体つきも昔に戻り二人は一つになり ひとがすむ家でするす

ひとのふるまい大地に根を生やしたような錯覚さえ生まれ 安布団の上を転げ回り疲れ果て消耗して前後不覚に深い眠りに落ち込む

味噌汁と炊飯器の蒸気の匂いが居間に立ち籠め 外の青黒い風は壁が遮り 部屋は明かりにつままれ 暮らしの温もりはラジオからもれる世の陰をよせつけず きづかれぬしあわせが存在の奥底にあった 顔も身のこなしもともに二十代のそれで尊敬のこもった二人称でよびあったのに

あなたは遠くなる遠くなる遠く……ときをさかのぼるにつれどのあなたもかなたかなたへすべる 機体は高度をおとし水面すれすれとなり波波波波にぶつかり激しくゆれ内腑もゆれキャノピーは飛沫の幕で何もみえず左右の視界は水煙が遮る

海水の抵抗でセスナは海面にとまる 波にゆれ寄る辺なくゆれ心細くゆれ どのあなたもそらのかなた やっぱりひとり だれもない海で腹のまんなかゆれ 映像もゆれゆれゆれて記憶のそこにしずむ 潜望鏡のように波間に顔をのぞかせ住処はどこかゆれてさがす。

O, amer Heimatloser, der sogar bodenlos geworden ist!

哀れなるかなさすらい人よ、抛って立つ瀬もなし。

◆ 移送記憶

高谷和幸

今朝起きたばかり

わたしたちの

た

おぼえていたものがここに

ながめているだけで

植物の体温がわずかに上昇する

わたしたちの

た

単集合の意識の奥底

ことばの海

骨盤のひろがり

死にゆくものへの

うでのように

た

これも偶有性

の擲手の

幾筋もの組みひもの

結び目のできた

た た た た

たてにおちるのです

◆ 自転車と崇高な自転車

高谷和幸

小学校の裏側にある

道筋(ライン)は

滅んでしまったのですか

すばまつたり

ふくらんだりして

そこに立っていたはずの父は

その肉片の

うらがえり

盛り上がった襟口のようなところ

今日という日は

風は吹き終わっていて

ライン(道筋)があつたここに

わたしたちが小さな結び目であつたみたいに

自転車を通つたことがあつた

ゆるんだ襟口から

木影と一緒にある

いつもと変わらない棕櫚の葉が

スペクトラムのように

道の上に

さしているのです

うた 神戸詞あしび

123-2018.06.24 大橋愛由等



収穫前のサトウキビ (徳之島にて)

NHK大河ドラマ「西郷どん」を毎回見ている。特に奄美が出てくる場面に注目した。この番組はあくまで歴史ドラマでありドキュメンタリーではないので、史実と合わせてみておかしいと、いちいち目くじらをたてなくてもいいのだが、ここでは番組(鳥篇)の背景にある奄美群島に関する事項を、いくつか箇条書きにしてまとめることにした。

* * *

①今年はずいぶん明治維新から一五〇年となる。明治一〇〇年にあたる一九六八年の大河ドラマの主人公は坂本龍馬だった。今回の西郷隆盛とおなじく維新の立役者である。つまり節目にあたる年には明治Ⅱ近代日本をつくった「偉人」たちが登場する。これはNHKをふくめて近代日本という言説を作ろうと企図しているひとたちと機関は、現在の日本を作ったのは維新で活躍した「偉人」たちであり、その所作を肯定的に受容していることがわかる。

②「維新勝ち組」のひとつ鹿児島県(薩摩藩の後継自治体)はことし「かごしま明治維新博」と銘打って、いくつかのイベントを開催。なかには薩長土肥と連携している行事もある。しかし、同じ鹿児島県下にあっても奄美群島は県本土と異なる明治維新とそれからの一五〇年を過ごしてきた。

奄美と「西郷どん」の背景を考えてみた

③奄美ではかねてより、明治維新を作ったのは薩摩藩の財政を支えた奄美の砂糖であるとの説が有力である。たしかに幕末期には藩財政における歳入の三割程度が砂糖による収入であった

事実がある。木綿売買や琉球経由の貿易による収入、賈金づくりなどとあわせて藩財政を支えた財源のひとつであったことは確かであるが、最近はこの「奄美の砂糖が明治維新をつくった」とする説をこまかく時系列的にかつ多角的に検証する研究(藩の通常財政における比重と倒幕資金への貢献を分離すること等)が進んでいることを紹介しておこう。

④NHK大河ドラマ「西郷どん」では奄美大島に住むことになった西郷隆盛が、薩摩藩による砂糖収奪の厳しさを目撃して、搾取されるという場面がなんどか登場。「砂糖のひと切れでも舐めたら死罪」であるとの奄美に伝わる伝承が近い形で表現され、「薩摩の圧政とそれに耐えるシマンチュ」という抑圧・被抑圧の構図(黒糖地獄)がわかりやすい形で映像化されている。

⑤この黒糖地獄とは、薩摩藩・鹿児島県が奄美群島に課した第二次「砂糖惣買入制」(180182)による砂糖納税の厳しさをシマンチュ側から表現したものである。それまでは課税された量の砂糖を藩に収めたあとの「余計糖」は自在に活用できたのだが、薩摩藩の財政が逼迫したことにより多くの砂糖による収益を得ようと、奄美群島で作られる砂糖のすべてを薩摩藩・鹿児島県が税としてとりたてたのがこの第二次「砂糖惣買入制」である。

⑥この第二次「砂糖惣買入制」の導入によって、奄美群島社会における階級分化の傾向があらかになる。シマンチュには(一)与人や横目といった島役人層(本土の庄屋クラス、ブゲンシヤなどともいう)(二)自作農(ジブンチュ)(三)家人(ヤンチュ・債務奴隷)という三つの階級がある。幕末になると、砂糖納税の取り立てに耐えきれなくなったか納税を放棄した自作農が、ヤンチュに身を落とす例も増えて、二百人ものヤンチュをかかえるブゲンシヤ(たとえば加計呂麻島諸屯集落林家)も出現している。この島役人層は薩摩の奄美支配の一端を担っていたことも事実なのである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.134
神戸

2018年06月24日 通巻134号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税別)